

世界100人の物語

私はこんな人になりたかった

集英社版 日本子ども文学全集



《4》勇気と冒険の物語

ガガーリン 白瀬矗 坂本竜馬 津田梅子 スコット
橋本五郎 右衛門 リビングストン 高野長英





世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

日本子どもを守る会・編

集英社

《4》勇気と冒険の物語

●	● ● ● ● ● ●	● ●
----------	---	-------------------

世界100人の物語全集

私はこんな人になりたい

会との申合わせにより検印を省略します

NDC 280

集英社・昭和38年

P260 22cm

第4巻 勇気と冒険の物語

昭和三十八年八月十日 印刷

昭和三十八年八月十八日 発行

編 日本子どもを守る会

発行者 陶 山 巖

印刷者 大 橋 貞 雄

印刷所 共同印刷株式会社

製本所 松 井 製 本 所

本文用紙 大昭和製紙株式会社特漉

発行所

株式会社 集 英 社

東京都千代田区神田一ツ橋二一三
電話大代表(30)三三 振替東京二五五三

定価三九〇円

はじめのことは「虎穴に入らずんば虎兇をえず」ということわざは、今でもわたしたちに、勇氣の真

理を教えている。ものにおそれていたのでは、未知の世界をさぐることもできない。正しい考えだと信じて

も、じつさいに主張することをおそれたり、おこなうことをしりごみしたのではなんにもならない。何もの

にもおそれない勇氣は、人間の文化を進歩させる原動力なのだ。この巻では、ほんとうの勇氣とはどんなも

のかを、身をもってしめした人びとの、勇氣と冒険の物語をとりあげた。



もくじ

世界100人の物語全集

《4》 勇気と冒険の物語

未知の世界を行く

最初に宇宙を飛んだ

ガガーリン

ふるさとの村…… 11

初のパラシュート降下…… 15

心は決まった…… 22

ロケット発射場へ…… 28

無重力の世界…… 34

この物語を読むまえに…… 9

ユーリー・アレクセービッチ・ガガーリンの小伝…… 10

瀬川昌男



南極一番乗りの日本人

日本で最初に南極を探検した

白瀬 直直

氷と雪におおわれた大陸…… 47

…… 永井 萌二

探検家のなみだ…… 47

……

野宿して上京したころ…… 49

……

長屋に住んでいる新聞記者…… 52

……

地球には北もあれば南もある…… 53

……

南の水の海へ走る 百四トンの古船…… 55

……

南極へ上陸…… 58

……

この物語を読むまえに…… 45

……

白瀬露の小伝…… 46

……



勝海舟との出会い…… 67

……

上佐勤皇党…… 70

……

海援隊を作って…… 72

……

国作りのすじ書き…… 77

……

来栖良夫

海援隊の旗

新しい国作りにたおれた

坂本竜馬

七才の女子留学生

女子教育の先駆者

津田梅子

京都近江屋の最期…… 80

この物語を読むまえに…… 65

坂本竜馬の小伝…… 66



山本藤枝

ランメン夫人の手紙…… 85

女子留学生が生まれたわけ…… 88

ちごわのかみ、長いふりそで…… 93

サンフランシスコに着いたころ…… 96

白い足のシカ…… 98

女子英学塾の誕生…… 101

この物語を読むまえに…… 83

津田梅子の小伝…… 84



命のかざり前進

南極探検の

スコット

極点をめざして…… 105

ひるがえる黒い旗…… 107

ああ、南極、その極心…… 111

エバンスの死…… 113

オーツの死…… 117

三人の死…… 120

極地の十字架…… 123

この物語を読むまえに…… 103

ロバート・ファルコン・スコットの小伝…… 104



タケづつをかついだ神さま

琉球おもての

橋本五郎右衛門

めずらしい神さま…… 127

七倉七やしき…… 127

こっそり決心…… 129

ひとりで船出…… 132

命がけも水のあわ…… 137

山本和夫

堀尾青史

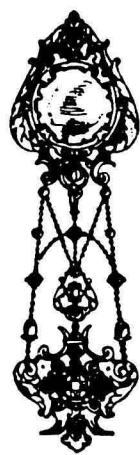
この物語を読むまにに……	125
橋本五郎右衛門の小伝……	126



暗国の大陸に光を

一生をアフリカ探検にささげた
リビングストン

ライオンがり……	143
アフリカへの道……	145
マコロの勇士に守られて……	152
けむりが音をたてる所……	158
十六年ぶりのイギリス……	163
ケブラバサの激流……	167
どれいを助ける……	172
第三回めの大探検……	178
どれい商人とともに……	180
スタンレーとめぐり会う……	187
リビングストン、ここにねむる……	192
この物語を読むまにに……	141



夜明け前のめざめ

古い日本と戦った蘭学者

高野長英

つめたく光る目………	199
蘭学者のなかま………	201
負けられぬ戦い………	203
事件のでっちあげ………	206
どくグモのあみ………	209
運命の日………	212
のびる黒い手………	216
ろうぐらし………	220
取り調べ………	224
深いなげき………	228
書き残す歴史………	232
ゆれ動く世の中………	237
母を思う………	241

火災の日…… 244

のがれ、かくれて…… 250

この物語を読むまえに…… 197

高野長英の小伝…… 198

はじめのことは…… 1

写真口絵

あとがき…… 255

作家紹介…… 260

文中の☆は、本文の重要なところを写真図版でしめしている。

装丁 A D 里 沢 田 重 隆 ・ D 鈴 本 康 行

本文レイアウト 広瀬 満



未知の世界を行く

最初に宇宙を飛んだガガーリン

ガガーリンも、小さいときは、こっそりと屋根にのぼって、広い広い畑と空を、ながめながら、空飛ぶゆめを見るのが好きだった。一九五七年十月、初めて、ソ連の人工衛星が打ちあげられた。そのとき、青年飛行士になっていたガガーリンは、二十六才のとき宇宙飛行士の試験にパスした。それから、はげしいくんれんが始まった。

はげしいくんれんをしのぶことは、すごく勇気が必要だったのだ。訓練にうち勝ったガガーリンは、ついに、宇宙船に乗って飛び立つ、栄光の日がやってきた。この一編は、その日がくるまでの感動を物語っている。

作・瀬川昌男

さしえ・小松崎 茂

ガガーリンの小伝

ユーリー・アレクセービッチ・ガ
ガーリンは、一九三四年三月、ソビ
エトのモレンスクで、四人きよう
だいの三番めとして生まれた。

父も母も農民で、コルホーズで働
いていたが、母は寛大だったが、父
は子どもにはきびしかった。

七才のとき、ソビエトはドイツ軍
に侵略され、ガガーリンは、子ども
ながらも勇ましく、ドイツ兵にたち
向かった。

中学校を卒業した後、農業機械工
場付属の職業学校にはいり、鋳造
工の技術を身につけたが、さらに、
サラトフの工業専門学校に進み、四
年生のとき航空クラブにはいった。
このとき初めて乗った飛行機がヤク
18つまり、時速百八十キロでのろの
ろ飛ぶ、古い複葉練習機であった。
オレンブルクの航空士官学校に入
学してから、良き友であり良き師で
ある、老練な飛行士マルチノフとも
知りあい、優秀な成績で士官学校を
卒業すると、北極の守備隊につとめ

その後、宇宙飛行士を志願した。
宇宙飛行には、なんんかの志願者
がいたが、飛行くんれんが進むにつ
れ、だんだんへり、けつきよく、志
願者は六人になった。

むずかしい試験とくんれんを突破
したガガーリンは、一九六一年四月
十二日、宇宙船ボストーク号に乗り
こみ全世界の注目のうちに、百八分
の、世界で最初の人間宇宙飛行に成
功した。

参考図書

岸田純之助訳 「宇宙船ボストーク」(岩波書店)
Y・ガガーリン著
江川卓訳 「宇宙への道」(新潮社)
科学朝日科学読売新聞スクラップ

写真提供

A P N 東和提供「地球は青かった」

ふるさとと村

ユーリーの家は、村はずれにあった。ユーリーはこっそりと、屋根にのぼるのが大すきだった。屋根の上からは、まるで海のように、はてもないコルホーズ（集団農場）の畑を、一目で見わたすことができた。頭の上には雲ひとつない青空が、静まりかえって広がっている。

「あの青空を飛んで、空と地面が一つになっている地平線のあたりまで、行ってみたいなあ——。」

おさないユーリーは、よくそんなことを、空想したものであった。

ユーリー・アレクセービッチ・ガガーリンは、一九三四年三月九日に、ソビエトのモレンスクで生まれた。父のアレクセイ・イワノビッチ・ガガーリンも、母のアナ・チモフェーブナも、コルホーズにつとめていた。足の悪い父は、とくいな大工仕事をやり、母は酪農場の主任で、ウシの世話にいそがしかった。ユーリーは四人きょうだいで、姉と兄と弟がいた。

父の弟のパーベルおじさんは、獣医だった。ユーリーたちは、おじさんが大すきで、ときどき家へきてとまっていたのを、楽しみにしていた。

おじさんがくると、乾草の上に麻布をしいて、大きなベッドを作り、ユーリーも兄のワレンチンも、おじさんといっしょにそこにねた。ねているとまどから、夜空をかざる星座が、くつきりと見えた。

ワレンチンが、おじさんに聞いた。

「お星さまにも、人が住んでいるかしら。」

「住んでいるよ。ねえ、おじさん。」

ユーリーが、すぐむきになっていった。

パーベルおじさんは、にっこりわらって、答える。

「人がいるかどうかは、だれにもわからないことだ。だがおじさんは、星にも何か、生物がいるにちがいないと思うよ。空には、なん百万という星がある。その星の中で、地球だけに生命があると考えるほうが、むしろ不自然だからねえ。」

おじさんの話を聞いたに、ユーリーは思った。

（どんなやつがいるか、星の世界へ探検に行ってみよう）

なあ——」

だが、ユーリーは、まだ小学校へさえも入学してはいない。早く大きくなりたいということが、そのころのユーリーの最大の希望だった。大きくならなけりや、なんにもできない。子どもじゃ、お星さまへなど行けやしな——。

このユーリーが、後に、人類史上最初の宇宙飛行士として、宇宙を征服することになろうとは、そのときだれが予想したであろうか。

ユーリーは、小さいときから勇敢な、おそれを知らない子どもだった。かれが七才のとき、ドイツ軍はソビエトにせめよせてきた。その二年ほど前から、第二次世界大戦が、始まっていたのである。

村からも、兵隊がどんどん前線へ出て行くし、避難民や負傷兵が、ユーリーの住むスモレンスクへも、送られてきた。

「敵は、すぐそばまできているぞ！」

そういう知らせが村につたわり、人びとは氣おい立つた。



ガガーリン 全人類の中で、最初に宇宙を飛んだ英雄。写真は職業学校時代。

その日、つばさに赤い星の印をつけた、飛行機が一枚、村の近くの沼地へ不時着した。飛行機は、空中戦で損害を受けていた。飛行士は、ようやくそこまで飛行機を誘導してきて、つい落するしゅんかんに、機からたくみにとび出したのであった。飛行機は、めちやめちやにこわれていたが、飛行士は、きせき的に助かった。

すると、すぐに沼地のとなりの草地へ、友軍機が着陸し、飛行士がとび出して、沼地の方へかけて行った。かれは戦友を助けるために、追いかけてきたのだ。

これを見つけると、村の子どもたちは、急いでそこへ



生家とユーリー ロシア共和国スモレンスク州グザーツの村にある。一家は農民で、この村は独ソ戦争の戦場となった。左上は技術学校時代のユーリー。

かけつけた。ユーリーもむろん、そのなかまだった。

ふたりの飛行士は、こうふんして、戦闘のありさまを手ぶりをまじえて語っていた。子どもたちは、飛行士をとり囲んで、からだにさわったり、めずらしそうに飛行機にながめいった。

「すごいな、あながいっぱいだ。一つ、二つ、三つ。」

つばさに敵の機銃弾であいたあなを、むちゅうで数えた。おとなたちも集まってきた。

「ごくろうさまでした。今夜はわしの家で、ゆっくり、つかれを休めてください。」

みんながそういって、飛行士たちをじぶんの家にとめたがった。

「いや、けっこうです。ぼくたちは、ここで休みますから。」

飛行士たちはそういって、じぶんたちの飛行機のそばで、夜を明かした。子どもたちも寒さにふるえながら、そばをはなれなかった。

ユーリーは、ふたりの飛行士の皮のジャケットの下のむねに、さんげんと、勲章がかがやいているのを見た。

それは、かれらが祖国のために、じぶんの生命をかけて戦った印であった。

（すてきだなあ——。ぼくも、この人たちのような、勇ましい飛行士になりたいなあ——。）

ユーリーは思った。飛行士になりたいというゆめが、その日からユーリーのむねにやどり、年とともにますます大きく、はつきりとしたものになっていった。

味方にとって戦況は悪くなった。コルホーズの人たちも、引きあげの用意にかかった。だが、まにあわなかった。

すさまじい砲声がとどろき、夜空が火事のようにまっかにそまつたあくる日、村にドイツ軍が侵入してきた。村の家は、かたっぱしからあらされ、めばしいものは、食物も着物も、みんな持つて行かれた。

ユーリーの家も、ほかの家と同じように、家から追い出され、あとにはドイツ兵が占領した。一家の者は土をほって、屋根をつけ、その中でくらしだした。

おとなたちは、かなわぬまでも、ドイツ軍を妨害し、すこしでもソビエト軍の役に立とうとしていた。おさな

いユーリーも、友だちの先頭に立って、なんと勇ましく活動したことだろう。活動は、おもに夜だった。

とがったくぎや、ガラスびんのかけらを、道路にまきちらした。

「ほうら、向こうから、ドイツ軍の自動車がやってくるぞ。見てろ、今、パンクするから……。」

「気をつけろ。木のかげにかくれるんだ!」

ユーリーたちは、息をこらして、じいっとくらやみで目を光らせていた。

パン、パン。

ものすごい音で、タイヤが、次つぎとパンクした。ドイツ兵が、自動車からとびおりてきて、大声でののしっていた。子どもたちは、すばしっこくにげて、決してつかまりはしなかった。

あるときなど、ユーリーは、かれの家を占領したドイツ兵の自動車の排気管に、ごみやぼろきれを、つめこんでおいだ。

「きさまだな、とんでもないいたずらしたのは。首ねっこをへしおってくれる。」